
ラグナロクオンラインSS第1章 番外編

梶原 ？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラグナロクオンラインSS第1章 番外編

【Nコード】

N53380

【作者名】

梶原？

【あらすじ】

ギルド「ヴァリアントユニオン」に入って早1ヶ月、毎日家事・洗濯と大忙しのエリイ。だがそんな日々にも優越感を感じていた。そんなある日、ついにエリイに重大使命が言い渡される・・・！！

クリス「ついに脱ぎます！！」

エリイ「脱ぎません！！」

（前書き）

基本的に二次創作です。

原作は背景のみと言っても過言ではないくらい少ないです。

これは前に投稿した第1章の番外編です。見てない方は大分話の展開が分からなくなっていますのでご注意ください。

ラグナロクサイドストーリー 第1章 Girl Meets Girl!!

番外編 エリイの憂鬱

みなさんはじめまして。エルクレスティア「マクレガー」です。
年齢は17歳らしいってセロさんが言っていました。何か色々調べた
っぽいんですが、方法はよくわかりません。

記憶喪失で彷徨っていたところをクリスさんに助けてもらって、早
1ヶ月たとうとしています。

そう、今私が住んでいるところ、ギルド「ヴァリアントユニオン」
のお家に居座って1ヶ月になりますね。

なんかクリスさんが「最後の方にキヤラー杯できたから適当に紹
介しといて。」なんて言われたので今こうやってるわけなんです。
・・。

誰に紹介するんでしょうね？ていうか私は誰に話しかけているんで
しょうね？

「大人の事情って奴よ。」

「うわぁー！！く、クリスさん横にいたんですか！！」

「ほら、いいからちゃっちゃと紹介しちゃって。午後は買出しに付
き合ってもらうんだから。」

「わ、わかりました。」

今まで一人でやってるものだと思っていたので、いざ隣に人がいる
と緊張します。

ゴホンッ、ではまず私の隣にいる人から。

彼女の名前はクリス・リンベルさん。私の命の恩人です。

私が魔物に食べられちゃいそうな所を救って頂いただけでなく、酔っ払い、強姦、ひとさらいななど色々な所で助けて頂いちゃいました。

「かつこいいわよね、我ながら。」

自分で言ったらダメだと思います。

黄色い髪が特徴のショートヘアーで、目つきは若干するどいですが、でも頭の中は正直何考えているかわかりません。

「愛・・・かな。」

クリスさんかつこいいセリフ言おうとしてまるっきり駄々すべりしてます。

体系はともシャープといいましょうか、アスリートのようなしなやかな筋肉で、ゴツゴツしている感じには見えません。身長は、いくつでしたっけ。

「りんご3つ分くらいかな。」

死んでください。

「ちょっとー、それはひどいじゃない!」

「クリスさんが紹介しろって言ったのに真面目に答えてないじゃないですか!」

「りんごって言ってもあれよ、ほら今話題の巨人族のりんご3つ分よ。」

「もろ時事ネタじゃないですか!2ヶ月で読めなくなりますよ」

！作者の意図を考えてください！！」

たまにクリスさんについていけなくなる時があります。
まあ気を取り直して続けたいと思います。

「あれ？」

「ん？どーしたの？」

「こんな所に質問の御はがきが来てますよ。」

「あら、あたしへの質問？このおねーさんが何でも答えてあげるわよ。」

「じゃー読みますね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何で読まないのよ。」

「・・・・・・・・。次いきましようか、次。」

「何、何て書いてあったのよ。ちよつと見せなさい！！」

「ああ！！ダメです！！」

取り上げられてしまいました。

「えーなになに。クリスさんの胸は・・どれくらいの大きさなんですか・・。エリイさんがクリスさんの服を着るときに・・？胸元が若干きつい・・って？」

なんかクリスさんの周りから白いオーラが見えます・・。

「く、クリスさん。落ち着いて下さい。きっと何かの悪戯です・・！」

「ちよつと用事があつたのを思い出したわ・・。」

逆鱗に触れたようです・・。

「うわー！！逃げてー！これ送った人逃げて下さーい！！クリスさん！！能力発動したままだこいくんですかー！！！！」

・・・。

言ってしまいました。

先に言っておきます。クリスさんに胸の話題はご法度です。ジャツジメントされちゃいますよ、全力で。

「ん？何か言ったエリイ？」

「いいえ何も言ってません！！」

どうやら行ったようです。送ってくれた方ご愁傷様です。

「おーい！次がつかえてるんだから早く紹介してくれー！」

ん？何でしょう？隣から声が聞こえますが。

「・・・ってええええええー！！」

なんかいつのまにやら見たことある人たちが私の横一列に並んでいます。

どうしてこの人たちはこういう事に関して感が鋭いんでしょうか・・・。

よく見ると奥の方にギルド関係ないエルハイムさんまでいます。どこで嗅ぎつけたんでしょうか・・・。

そして何で私はインタビュアー見たいになっっているのでしょうか・・・。

「エリイちゃん、嘆いてないで早くやろうぜー。」

続けるみたいです。よくわからないけどその人、付き合っ

さい。

「ハルトさんです。職業は漫才師です。」

「ここでもその紹介なの!!??」

さっそくノリがいいです。もうこれでいいんじゃないでしょうか。

「いやよくないよくない!お願いちゃんとしてえ!」

これ以上泣き付かれてもあれなので、ちゃんと紹介することにします。

彼の名前は……。何でしたっけ。

「ハルト! ロックハルト! ガーランド!」

ああ、そうでした。通称ハルトさんです。記憶喪失なんで忘れてしまったところでした。

「いや記憶喪失関係ないよね! ぜんぜん覚える気ないよね!」

今私が所属させて頂いているギルド「ヴァリアントユニオン」のギルドマスターさんです。

髪の毛は赤みの入ったブラウン色で、耳まで掛かるくらいのショートヘア、前髪も目に掛かるくらいと、まあ兆度いいんじゃないでしょうか。

「何その適当な説明。」

ちょっとボサボサ気味なのがたまに傷です。

「ほつといて!!」

何より服の趣味が派手です。最初あった時はここ南国?とも思いうkraいのアロハなシャツを着てました。基本的に原色系が好きみたいです。

「ピンクとかも好きだぜ!」

職業は商人さんで、基本はプロンテラのメインストリート沿いであり、やしい商品売ってギルドの運営を行っているようです。

「これでもちゃーんと月の生活費稼いでるのよー。毎日暖かい御飯が食べれるのも俺のおかげ!!」

最近芋が多いです。

「それは言わないで!!」

あ、ちなみにさっきのドタバタで言い忘れましたが、クリスさんは一応聖職者、一般にはプリーストなんて呼ばれている職業です。その中でも退魔専門、最近の聖職者さんは戦えないとダメなように、戦闘に特化した班に所属している様です。

「クリスが聖職者なんて世も末だよなー。」

ここにクリスさんがいたらきつと死体が一個追加されているかもしれません。アンデッドだから大丈夫、とか言いそうです。

「なんかさ、最近エリィちゃんもクリスに似てきたよな。お願いだから清楚なままでいてー!!」

記憶喪失なのでよくわかりません。

「都合のいい記憶喪失ですね!!」

「ほら、もうアンタの紹介は終わりだよ!次はボク!」

またハルトさんが吹っ飛ばされていきました。きっとあの人はこういう役回りだと思います。

「大丈夫よ!彼は喜んでやってるんだから!」

ぜったい裏で泣いてると思うのは気のせいでしょうか。

まあ後がつつかえているらしいので次いきましよう次。

今私の隣にいるのは珠^{シユ} 梨燕^{リエン}さんって方です。ちよつと読みづらい名前なのは、ここから遠い国、アマツというところの出身だからだそうです。

「ボクの事はリエンって呼んでね!」

ボクっ子です。綺麗なクセの無い黒のロングヘアを両端でお団子状に纏めて、その部分をシニヨンキャップで被せています。

ちよつとかわいらしいですね。身長もそこまで高くなく、よく年齢の割りに年下に見られるようです。

「ちなみに19歳だからね!!」

その割にはこの前お酒を飲んで酔っ払っていたように思えるのですが、特に気にしないことにしましょう。

彼女は見た目通りなんですけど、拳術と言われる武術を会得している様です。職業の扱的にはモンクと言われる部類だそうで、クリ

スさんと同じプロンテラ大聖堂管轄の警護班、自警団と似たような感じの部署で働いているみたいです。

「まあ騎士か、聖職者かつてところで管轄が違うのよね。どちらも街を守る役割は変わらないよ！」

その割には結構縄張り争いが耐えないそうです。引いたら食いつばぐれますもんね。

「難しい言葉知ってるねエリイ。」

このリエンさん、これから紹介するアル君、あとクリスさんとハルトさんと私で集団生活をしています。なんか毎日騒がしいですが楽しいですよ。

「まあうちの男連中はみんな奥手だからみんなが期待してる展開はまずないよ！」

単に女性の方が強すぎるのかと思います。恐妻政治って奴です。

「エリイだんだん廃れてきたね。」

でもきつと女性×女性という展開も好きな人は好きかもしれないですね。

「エリイもう言ってる事がよくわからないよボク。」

年齢が近いせいか、一番よくお話するのもリエンさんです。これからもよろしくお願いしますね、リエンさん。

「な、なんかよくわからないけどちょっと怖いよエリイ。」

「次は俺の番だよ!!」

「来たな年上キラー!」

はい、じゃあそういうわけなので次いきましょうか。

今リエンさんのすぐ横にいるのは、アラン「クロエ君。みなさんはアルって呼んでますね。

「よろしく!!」

金髪のツンツン頭が特徴的の男の子です。年は16歳ですが、何か見た目は14歳くらいの子に見えます。結構な童顔って奴ですね。

「俺はもつと男らしくなりたいんだけどなあ、ハルトにいちちゃん見たいに。」

アル君、きつとそれを見本にはいけないと思います。

この子はこう見えて剣士さんです。今は将来の騎士を夢みて訓練校に通っています。結構筋がいいらしいですよ?

「同じクラスに俺のライバルがいるんだ!絶対奴には負けたくない!」

なんかこうアバウトな人達がいる中に熱血キャラって燃えますよね。

「エリイ、なんかもうコメントが評論家染みてるよ。」

平日は学校、休みの日はギルドの人たちに戦闘訓練を受けてるみたいで、結構大忙しです。

まあうちは戦闘に特化した人ばかりですからね。かなり辛いみたいですよ。

「エリィねーちゃんもがんばればいいのに。」

「クリスさんが無茶振りすぎるんです！いきなりフエイヨン洞窟行つてウォルヤファ狩つて来いとか無理です！！」

「エリィも苦労してるね……。」

ちなみにウォルヤファというのはフエイヨン洞窟に巣くう主のような者です。

「何、あの子そんな無理やらせてるわけ？」

「あ、エルハイムさん。」

今の話を聞いてかエルハイムさんまでやってきました。わざわざプロンテラから……。

「あたしだけじゃないわよ？」

「え？」

「おう、ここか？事件の秘密がわかって来たんだが。」

「違いますよ隊長。ここは出番の少なかつたウチたちが唯一活躍できる場所ですよ！」

「誰ですかあなたたちー！！！」

なんか鎧を着た青髪の男の人と同じ感じの黒髪の女性が突如乱入してきました。もう収集がつかません……。

「まあとりあえず紹介しとけばいいんじゃないかしら？」

紹介つて言つても後の二人名前すら知らないんですがいいんでしょう

うかエルハイムさん……。

「うう……。と、とりあえず続けます。」

まずはエルハイムさんです。エルハイム「コージリフ」ヴァンフィールド、みなさん名前が長いのでエルハイムさんと呼んでいます。見た目はブラウン色のセミロングヘアで、両サイドの髪を肩から前に垂らし、それぞれを毛先の近くでアクセサリのような金具で結つてあります。

若干垂れ目で、瞳は碧眼という特徴的な目をしています、なんか綺麗ですね。

「よろしくお願いしますね。」

そんな深々とお辞儀した人誰もいませんでした。涙が出てきそうです。

エルハイムさんはプロンテラにある王立聖術魔術中央研究院（通称：王立聖魔研）というところの総合研究部・主任という肩書きを持っています。

ところでここってどういう所なんでしょうね？

「ここはね、本来私達にある精神力というものを解明して、それを様々な分野、魔術開発から生活用品利用に至るまで研究している所で、今までも数多くの成果を上げて来た機関でね、総合研究部というのはその開発を全て纏めている部署で、その主任というのは……」

「はい、これ以上長くなっても大変なのでとりあえず、すごいことつて事でまとめましょう。」

「えー！まだ話したいことの10%も言っただけなのに……！」

「尺が少ないんです……！」

「エリイ、もう言ってることがラジオのDJ見たいだよ。」

とりあえず続けます。彼女は魔術師としても名が通っていてその筋では結構有名みたいです。なんでも4大属性、火・風・地・水に関わる魔術は大抵使えるとか。クリスさん情報だともっと違う種類の魔術も扱えるそうで。

「ふふ、それは後のお楽しみですよ。」

その含み笑いがとても怖いです。

さて、もう大体紹介し終えたのですが。

「うおーい！俺たち忘れてはいないかいおじょーさん！！」

ああ、何かそういえば二人ぐらいいましたね。

「と、言っても私はあなたたちの事知らないので適当に自己紹介してください。」

「冷たっ！この子かわいい顔して冷たっ！！」

「まあまあ隊長、早く終わらせて御飯食べにいきましょーよ。」

「お前は御飯の事しか考えてねえのか！！」

何か急に男性の背中からハリセンみたいなのが出てきました。見事に女性の頭にクリーンヒットです。

「漫才師・・・？」

「ちがうわ！！」

とりあえずもう時間無いのでちゃっちゃとやっちゃって下さい。

「ゴホンッ、えゝ俺の名前はア、あく・・アクセ」

「隊長めっちゃ緊張してますね。こういうの弱いんですね。」

「うるせえ!!」

また叩かれています。やっぱり漫才師でいいんじゃないでしょうか。

「違う!!俺の名前はアクセル!!ガルヴァデイス!!名誉あるプロンテラ騎士団の遊撃部隊1番隊長だ!!」

「みなさんが噛むといけないので、哀愁を込めてアクセルちゃんって呼んであげて下さいね!」

「お前はいい加減だまれ!!」

今度は顔面にクリーンヒットです。それでもへこたれないあの人は何者なのでしょうか。

「で、こっちにいるのがセシル!!アマクサ。1番隊の副隊長だ、大変不名誉だが。」

「隊長ゝひどいですよ。いつもあんなに尽くしているのに。よよよ。」

「何で急に俺悪者見たいな言い方するの!!」

「あーあーかわいそうに。大丈夫ですかアマクサさん。」

「この隊長ね、ひどいんです。いつもウチの頭をパンパン叩くんです。。。」

「それはひどいですね。。。」

「だーかーらー!何で俺が悪者みたいにされちゃってるのよ!!」
「俺たちはそういうキャラなんだよ、なあ兄弟。」

いきなり壁際で意識を飛ばしてたハルトさんが乱入してきました。なんか二人で肩を組んで泣いているようです。

「あ！アクセル隊長だ！！」

今度はアル君が気づいたようです。この二人も面識あるみたいですね。

「俺の師匠だよ！あつ！またセシルさんを泣かせてますね隊長！」

「何でお前まで乗ってるんだよ！！俺がいつそんなことしたっつのだ！！」

「あー！！お前はボクの邪魔をいつもする槍ツンツン女！！」

今度はリエンさんです。そういえば大聖堂と騎士団は仲が悪いのでしたっけ。この状況まずいですよね。

「邪魔をしてるのはどっちですか！あれはウチの管轄ですよ！このワンパク暴力女！！」

何かここで抗争が始まりそうです・・・。

うわーなんか金属がぶつかる音やら精神力スキルを使う音が聞こえてきます。

とても鬱になりそうです・・・。

「ほらエリイ何やってるの、逃げるわよ。」

「ほえ？クリスさん？」

お部屋の外にあるベランダからクリスさんが手を招いているのどつとと逃げてしまいました。

今でもお部屋からぎゃーぎゃー音が聞こえてきます。怖い怖い。

「クリスさん、もう帰ってきてたんですか？」

そう言つてクリスさんの姿を見るとなんか血飛沫がついています。本当にやっちゃったんですか……。

「大丈夫よ、これ血糊だから。」

「どうやったら血糊なんてつくんですか!!」

まあとりあえずしばらくあの部屋には戻れそうもないですね。

「あ、そういえば。」

「？」

「あなたの紹介がまだだったわね。」

いきなりそんなこと言うのでちょっとドキツとしてしまいます。

「彼女の名前はエルクレスティア」マクレガー」。うちの大事なギルドの一員よ。愛称を込めてエリィって呼んでね。」

「クリスさん……。」

「ちなみに仕事は、炊事・洗濯・買出し・掃除・アルを朝起こす係、どれも優秀よ。」

「クリスさん、私すごく悲しくなってきました。」

「何いつてるの、あなたがいるから私達は気持ちよく仕事行けるし、生活できるのよ。胸張っていいわ。」

「は、はい!」

「あ、でもあんま胸強調しないでね。」

その笑顔がもう悪魔の顔にしか見えないです……。

「ほら、じゃー買出しでも行きましょ!」

「はい!!」

色んなことがあります、私はここに入ってよかったと心から思えます。

番外編 完

「ねえ、私の事忘れてない？」

「セ、セロさん！！」

「私も忘れてます！！」

「楓ー！！」

（後書き）

ここまでお付き合い頂きありがとうございます。

感謝・感激・雨・クリスマス です。

こういう表現方法というのもおもしろい気がしたのでやってみました。

ご不快になった方、申し訳ございません。

第2章も少しづつ形になってきているので、投稿したらよろしければ見てやって下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5338o/>

ラグナロクオンラインSS第1章 番外編

2010年10月27日02時37分発行